

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

令和5年度（2023年度）発生予報第12号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和5年度（2023年度）病害虫発生予報第12号（3月予報）

I 気象予報：令和6年（2024年）2月22日福岡管区气象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
九州北部全域 （含、山口県）	気温	30	40	30
	降水量	30	40	30
	日照時間	40	30	30

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	カンザワ ハダニ	並	やや多	並(±)	並～やや少 (-)	気温並(±) 降水並(±)	
カンキツ	かいよう病	やや多	並	やや多(+)	並～やや少 (±)	降水並(±)	
	ミカンハダニ	やや多	やや多	やや多(+)	並(±)	気温並(±) 降水並(±)	
冬春 トマト	灰色かび病	並	やや多	並(±)	並～やや少 (±)	降水並(±)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 トマト	黄化葉巻病	やや多	やや多	黄化葉巻病 耐病性品種 並(±) 感受性品種 多(+) コナジラミ 並(±)	黄化葉巻病 やや多～並 (+) コナジラミ やや多～並 (±)	(コナジラミ) 気温並 (±)	
冬春 ナス	すすかび病	やや多	多	やや多(+)	並(±)	降水並(±)	
	灰色かび病	やや多	やや多	やや多(+)	並～やや少 (±)	降水並(±)	
冬春 キュウリ	うどんこ病	並	並	並(±)	やや多(+)	降水並(±)	
	べと病	やや多	並	やや多(+)	やや多(+)	降水並(±)	
	灰色かび病	並	並	並(±)	並(±)	降水並(±)	
ウリ科 野菜	キュウリ・ メロン 退緑黄化病 スイカ退緑え そ病	並	並	(キュウリ) 退緑黄化病 やや少(-) コナジラミ やや少(-)	キュウリ やや多 メロン、 スイカ 並 (±)	(コナジラミ) 気温並(±)	
イチゴ	ハダニ類	多	多	多(+)	やや多～並 (+)	気温並(±)	
	アザミウマ類	やや少	やや少	やや少(-)	並(±)	気温並(±)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 果菜類	コナジラミ類	並	並	トマト、ナス 並 キュウリ やや少 (±)	トマト やや多~並 ナス、キュウリ メロン、スイカ並 (±)	気温並(±)	
	アザミウマ類 (イチゴ除く)	並	並	ナス、 キュウリ 並(±)	ナス 並 キュウリ やや少 (±)	気温並(±)	
	アブラムシ類	並	並	トマト、 ナス、 キュウリ、 イチゴ 並 (±)	キュウリ やや多 メロン やや多~並 トマト、 ナス、 イチゴ、 スイカ 並 (±)	気温並(±)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

## 2 予想発生量、根拠、対策等

### ◎茶

#### 1) カンザワハダニ

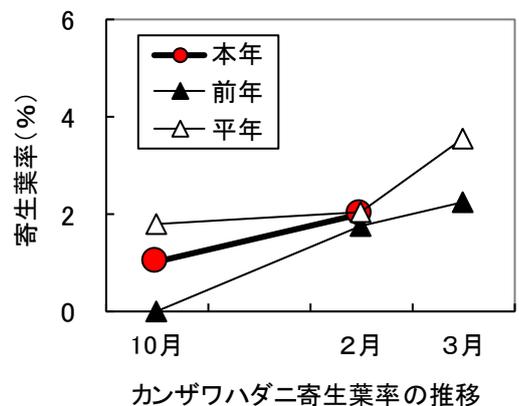
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では寄生葉率 2.0% (平年 2.1%) と平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 発生状況をよく観察し、適期防除に努める(3 防除のポイント等の「茶のカンザワハダニの発生に注意しましょう」を参照)。

イ 防除にあたっては、薬剤が葉裏まで届くよう規定の散布量で丁寧に散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



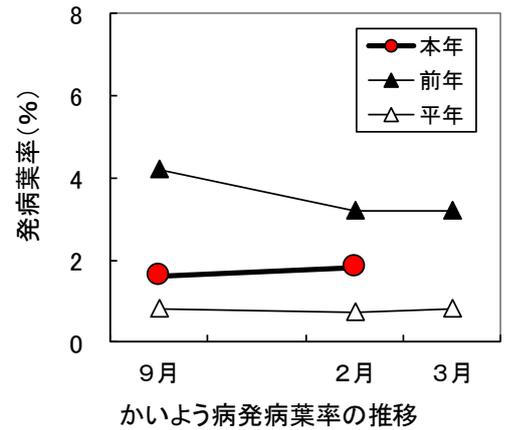
本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎カンキツ

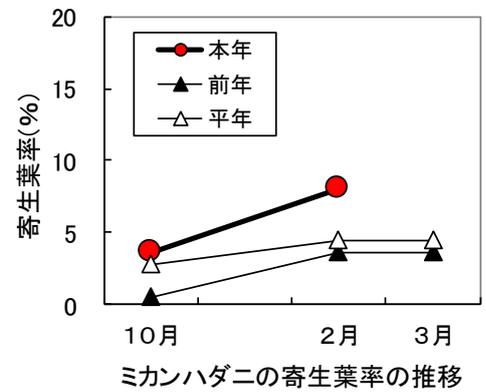
1) かいよう病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 2月の巡回調査では一部ほ場で多発生が確認され、発病葉率1.8%（平年0.7%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 伝染源は、前年に葉や枝に形成され越冬した病斑である。伝染源が多い場合は、その後の発生も多くなるので、発病した葉や枝の剪除を徹底する。  
イ 春先の発病が多い場合には、果実への感染も多くなるので、発芽期の防除適期を逃さないよう注意する（3 防除のポイント等の「果樹類の春先の病虫害防除について」を参照）。



2) ミカンハダニ

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、寄生葉率8.0%（平年4.4%）、寄生頭数4.7頭/10葉（1.2頭/10葉）と平年比やや多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア ミカンハダニの寄生密度が上昇し、多発すると防除が困難になるため、発芽前にマシン油乳剤を散布し、初期密度を下げる。ただし、樹勢の弱い園ではマシン油乳剤の散布を控える（3 防除のポイント等の「果樹類の春先の病虫害防除について」を参照）。

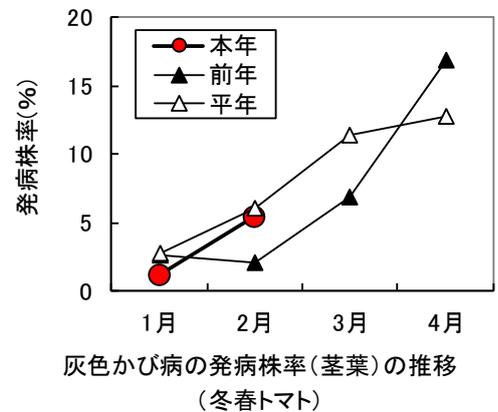


イ 越冬期にマシン油乳剤を散布しなかったほ場では、ミカンハダニの発生に注意し、4月以降の薬剤防除を徹底する。

◎冬春トマト

1) 灰色かび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、茎葉の発病株率5.4%（平年6.1%）と平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。  
イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。



ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



## 2) 黄化葉巻病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、耐病性品種で発病株率1.1%（平年2.5%）と平年並の発生であったが、感受性品種においては発病株率3.5%（平年0.8%）と平年比多の発生であった（+）。

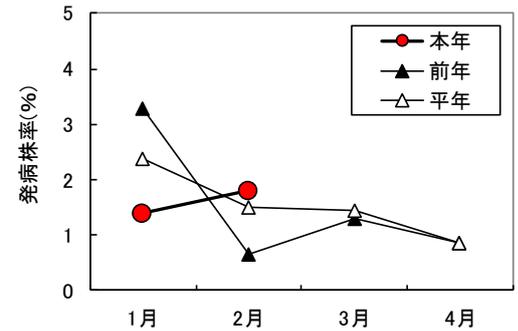
イ 2月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率は0.6%（平年0.3%）と、平年並の発生であった（±）。

ウ 防除員報告では黄化葉巻病の発生が3地域中2地域で平年よりやや多い発生であった（+）。

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策及び保毒虫を施設外に出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ 施設内外の雑草はタバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着板トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



黄化葉巻病の発病株率の推移  
(冬春トマト)

## ◎冬春ナス

### 1) すすかび病

(1) 発生量：やや多

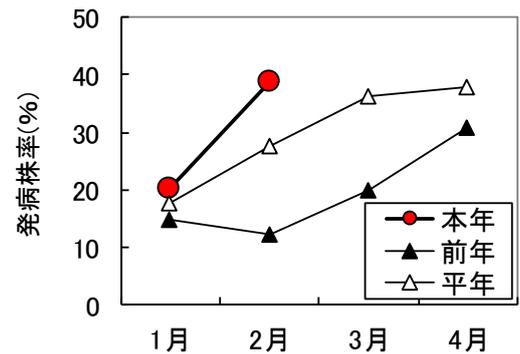
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、一部ほ場で多発が確認され、発病株率33.8%（平年27.7%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すすかび病の発病株率の推移  
(冬春ナス)



## 2) 灰色かび病

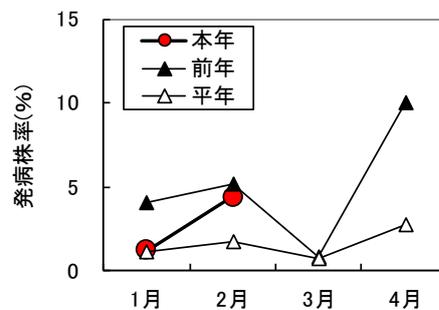
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病株率4.4%（平年1.7%）と平年比やや多の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



灰色かび病の発病株率の推移  
(冬春ナス)

## ◎キュウリ

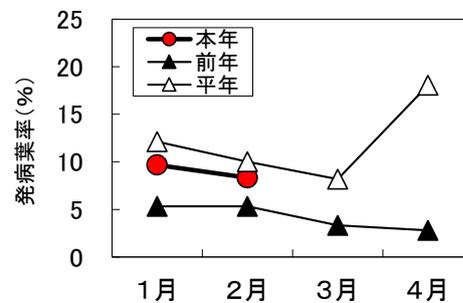
### 1) うどんこ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病株率8.3%（平年10.0%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病の発病葉率の推移  
(冬春キュウリ)

### 2) ベと病

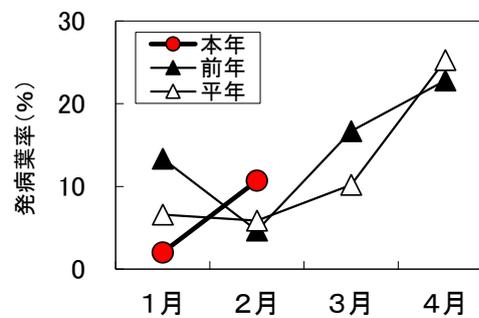
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病株率10.7%（平年5.9%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、過湿を避け肥培管理に注意する。

イ 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



べと病の発病葉率の推移  
(冬春キュウリ)



### 3) 灰色かび病

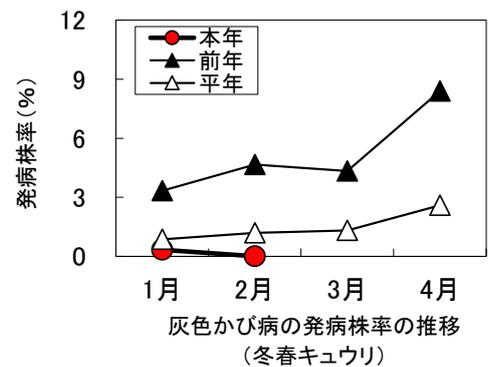
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、発病株は確認されず（平年1.2%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。さらに、暖房機等で施設内の空気を循環させ、植物体の周囲を過湿状態にしないようにする。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



### ◎ウリ科野菜

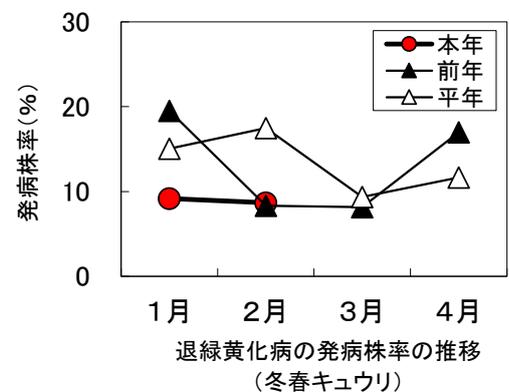
#### 1) キュウリ・メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、キュウリで発病株率8.7%（平年17.5%）と平年比やや少の発生であった（-）。

イ 2月の巡回調査では、キュウリでタバココナジラミの寄生葉率0.3%（平年4.3%）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 保毒虫を施設内で「増やさない」対策および施設外に「出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。



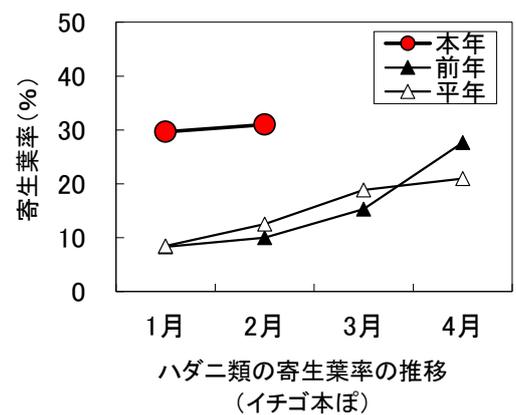
### ◎イチゴ

#### 1) ハダニ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、寄生葉率31.0%（平年12.5%）と平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 現在発生が少ないほ場でも、気温が上昇すると、急激に増加するため、発生初期に防除を徹底する（詳細は、3 防除のポイント等の「イチゴにおけるハダニ類の防除対策」及び令和6年1月30日付け発生予察注意報第2号（



<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/239601.pdf>）を参照）

。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

## 2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや少

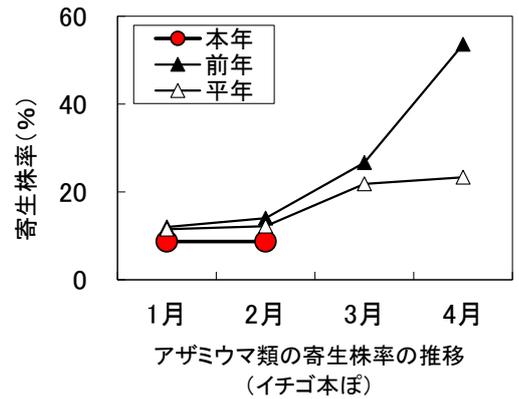
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、寄生株率8.7%（平年12.2%）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア これからの時期は、施設内での発生が増加するので、花を注意深く観察することで早期に発見し、発生初期からの防除を徹底する。

イ 施設内外の雑草は、重要な発生源となるので除草を徹底する。

ウ 薬剤防除にあたっては、天敵や訪花昆虫（ミツバチ等）への影響を考慮し、薬剤を選定する。なお、ヒラズハナアザミウマについては、薬剤感受性検定の結果も考慮する（詳細は、令和6年1月30日付け発生予察技術情報第10号（<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/239602.pdf>）を参照する）。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



## ◎冬春果菜類

### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：並

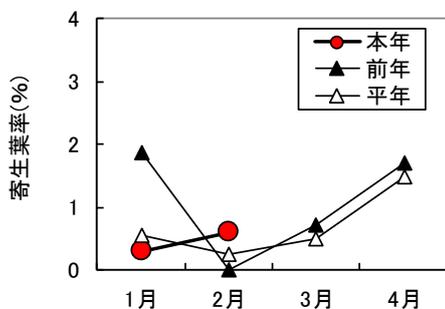
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、トマトでは寄生葉率0.6%（平年0.3%）と平年並、ナスでは寄生葉率5.6%（平年5.7%）と平年並、キュウリでは寄生葉率0.3%（平年4.3%）と平年比やや少の発生であった（±）。

(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

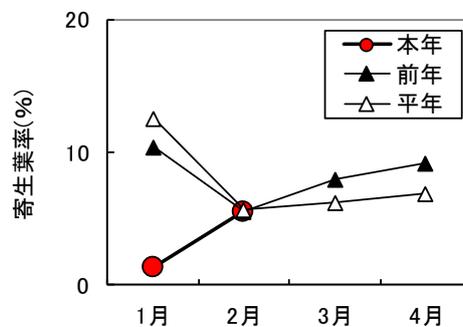
イ 施設内外の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

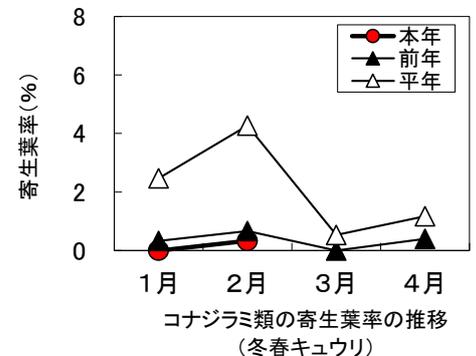
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



コナジラミ類の寄生葉率の推移  
(冬春トマト)



コナジラミ類の寄生葉率の推移  
(冬春ナス)



コナジラミ類の寄生葉率の推移  
(冬春キュウリ)



## 2) アザミウマ類 (イチゴ除く)

(1) 発生量：並

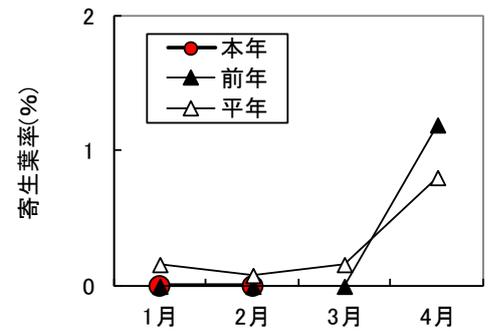
(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、ナスで寄生葉は確認されず(平年0.1%)平年並、キュウリでは寄生葉は確認されず(平年1.2%)平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア これからの時期は、施設内での発生が増加するので、粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、早期防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

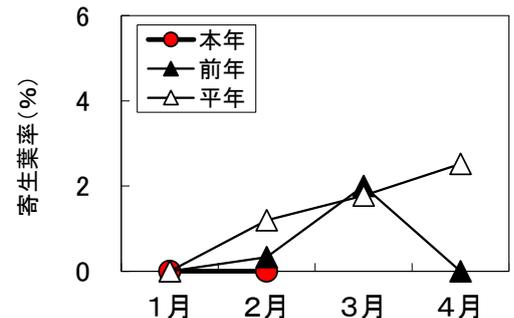
イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

ウ 施設内外の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生率の推移  
(冬春ナス)



アザミウマ類の寄生率の推移  
(冬春キュウリ)

## 3) アブラムシ類

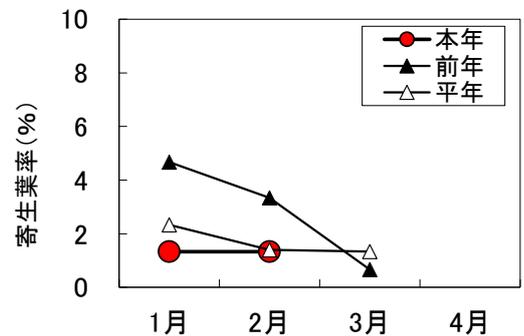
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 2月の巡回調査では、トマト、ナスで寄生葉は確認されず(寄生率平年 トマト0.0% ナス0.0%)平年並、キュウリでは寄生葉は確認されず(平年0.1%)平年並、イチゴで寄生率1.3%(平年1.4%)と平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 気温の上昇に伴い、有翅虫の飛来が多くなるため、施設開口部等への防虫ネット展張によりほ場内への侵入を防ぐ。

イ 吸汁によってウイルスを媒介するため、発生に注意し、発生初期の防除を徹底する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アブラムシの寄生率の推移  
(イチゴ本ぼ)



## 茶のカンザワハダニの発生に注意しましょう

カンザワハダニは、平均気温が7～8℃以上になると産卵を開始し、10℃を超えると産卵が活発になります。

防除適期は平均気温が10℃以上になる3月中旬から下旬頃となりますが、気象予報によると3月の気温は平年より高い予想であるため、例年より早くカンザワハダニの活動が活発になり、防除適期が早まることが懸念されます。

一番茶萌芽前の防除の良否が年間の発生量を左右しますので、経済許容水準（寄生葉率20%以下）を参考として、茶園での発生状況をよく観察し、適期に防除を行いましょ

## 果樹類の春先の病虫害防除について

### <カンキツ>

- 1 ミカンハダニは、発芽前のマシン油乳剤散布により初期密度を抑制しましょう。散布の際は、樹全体にムラなくかかるようしっかり丁寧に散布しましょう。なお、マシン油乳剤は樹勢の弱い樹に悪影響を及ぼす場合や発芽後の高濃度散布で薬害が生じる場合がありますので、樹勢や使用時期・使用方法に注意して使用しましょう。
- 2 マルカイガラムシ類の発生が多い園ではマシン油乳剤の散布により、越冬世代の防除を行いましょ。樹勢の低下などの要因からマシン油乳剤を散布できない場合は、3月中旬頃にアプロード水和剤とアビオンEを混用散布しましょ。また、マルカイガラムシ類とはふ化時期が異なるロウムシ類の発生が見られる場合は、ふ化幼虫が多く見られる6月下旬～7月上旬頃に防除しましょ。
- 3 かいよう病は、前年に発病した旧葉や枝が初期感染源となり、3月中旬以降の降雨により、葉の病斑から菌が流れだし、感染が始まります。薬剤による防除は、発芽前の防除が特に重要であり、発芽前～5月の予防を徹底しましょ。
- 4 そうか病は、旧葉の病斑が伝染源となるため、昨年発生が多かった園では特に注意が必要です。薬剤防除では、初期の予防が重要であるため、幼芽期（新芽が5mm以内）の防除適期を逃さないよう注意しましょ。

### <ナシ>

黒星病は、展葉直後から感染し始め、発病するまでの潜伏期間が14日以上あります。感染に気付かず薬剤防除が遅れると多発するため、予防散布を徹底しましょ。特に、3月中下旬の萌芽初期、3月下旬から4月上旬の開花期は、最も重要な防除時期となるため、薬剤を散布するタイミングを逃さないよう注意しましょ。



# 野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらの微小害虫は、気温が高くなると活動が活発になるため、今後、ウイルスを持った虫（保毒虫）が施設外に拡散することによってウイルス病の発生が増加することが懸念されます。

そこで、確実にウイルスの伝染環（つながり）を絶ち、地域におけるウイルス病の拡大を防ぐため、以下の2つの対策を必ず行いましょう。

## 1 保毒虫を施設内で「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、施設内に残った微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) 施設内に粘着トラップを設置し、害虫の早期発見、初期防除を徹底する。また、コナジラミ類の発生がみられるほ場では、継続した防除を行う
- (2) ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。
- (3) 発病株は、重要な伝染源となるので適正に処分する。
- (4) ウリ類の連続栽培を行う場合は、保毒虫を次作に持ち越さないように防除を行う。

## 2 保毒虫を施設外に「出さない」対策

地域（野外）の保毒虫密度を高めないために、施設内から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

- (1) 定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れが無いか点検し、必要に応じて修繕を行う。
- (2) 成虫に効果の高い薬剤を主体とした薬剤防除を行う。
- (3) 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。
- (4) 悪天候などで作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
- (5) 地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫及びウイルスを完全に死滅させる。
- (6) 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。



## イチゴにおけるハダニ類の防除対策

現在ハダニ類の発生は平年と比較して多く推移しており、気温が上昇するにつれてさらに増加する恐れがあります。特に、3月以降は収穫盛期となり防除が遅れがちになるため、早めの防除を徹底しましょう。

- (1) 未発生ほ場への持ち込みを防ぐため、ハダニ類が発生しているほ場の管理作業は最後に行う。
- (2) 薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行う。除去した葉はポリ袋に詰めるなどしてほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- (3) 薬剤防除は、十分な液量で薬液が葉裏にかかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。
- (4) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いため、7日程度の間隔で複数回散布する。
- (5) カブリダニ類を放飼したほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を使用しハダニ類の密度を抑える。ただし、ハダニ類の発生が多く天敵で抑えきれない場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。
- (6) 薬剤の中にはミツバチの活動に影響を及ぼすものもあるので、影響の小さい薬剤を選択し、危害が出ないように使用する。

## 露地葉菜類における病害虫対策について

2月の防除員報告において、菌核病の発生が平年より多い状況です。菌核病は発病株にできる耐久体（菌核）が伝染源となり、翌年の発生に大きく影響します。また、他の病害虫についても収穫後の後片付けが不十分だと次作以降に蔓延する可能性があるため、下記の対策を徹底しましょう。

- (1) レタスやキャベツでこれからの時期に結球する品目については、予防的に薬剤防除を行う。
- (2) 発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。
- (3) 植物上に生じた菌核が伝染源になるため、耕うん等により収穫後の株を積極的に枯らす。



### III 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
冬春 トマト	疫病	並	巡回調査では発病株は確認されず平年並(±)。 防除員報告では平年比やや多～少(±)。 発病後は防除が困難なので、予防に重点をおく。 前年に発生が多かった場合は、定期的に薬剤散布を行う。
	葉かび病	やや少	巡回調査では発病株が確認されず平年比少(－)。 防除員報告では平年並(±)。 発病葉は伝染源となるので早期に除去し、処分する。
	すすかび病	並	巡回調査では発病株が確認されず平年比やや少(－)。 防除員報告では平年並(±)。 発病葉は伝染源となるので早期に除去し、処分する。
ウリ科 野菜	つる枯病	並	防除員報告ではメロンでやや多～並、スイカで平年並(±)。 株元周辺をできるだけ乾燥状態に保つ。 窒素質肥料の多用を避け、適正な肥培管理を行う。

#### 【野菜病害虫の共通対策事項】

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。
- ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

### IV その他

#### 農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

## トマトキバガの防除薬剤について

トマトキバガについては、令和3年に国内で初めて発生が確認され、本種に対する適用農薬がなかったことから、植物防疫法第29条第1項の規定に基づき、県内で被害が想定されるトマト、ミニトマトに使用できる農薬の一覧を病虫害発生予察情報（特殊報）や病虫害防除所のホームページに掲載した経緯があります。

今般、令和5年11月28日付け消費・安全局植物防疫課長通知により、同規定による防除は終了し、トマトキバガ対象の防除に適用がない農薬を使用できなくなりましたので、ご注意ください。

また、本虫は侵入警戒有害動植物（植物防疫法第16条に規定される通報義務の対象）であることから、農作物の栽培等において発生が見られた際には病虫害防除所までご連絡ください。

<侵入病虫害を発見したらお知らせください（熊本県）>

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/173364.html>

- ◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所（農業研究センター生産環境研究所予察指導室）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。



本予報は、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)